

102×4～大豆の本能には逆らえ
ませんでした～

高菜わさび

「それじゃ、組み手を始めるか」

「はい、師匠」

右手に箸、左手には豆腐を乗せた平たい皿。

「では始め！」

かけ声と共に、右手の箸で相手の豆腐を狙う（食べる）

（私ではまだ師匠の足下にも及ばない）

師匠は弟子の豆腐に、醤油を追加するほど余裕を見せた。

「早く、お前も、オカカやネギをかけても飛ばないほどの、実力を身につけるんだ」

この競技は、優れた箸さばきと、豆腐をこぼさぬバランスを身につけられるので、小さい頃から習う人も多い。

オオアリクイ

最近津軽人と友達になった。

「あっ、オオアリクイですよ、オオアリクイ！」

「意外と津軽弁出ないな」

「みんなに言われますね」

「でも、あれだろう？津軽弁だと、『りんごっこ』とか、『ほたてっこ』とか、食べ物に○○
っこってつけて呼ぶじゃん、あれ、女の子みたいでイヤだな」

「いえ、豆腐は豆腐ですよ」

津軽弁で、『豆腐っこ』とは言わない。

「豆腐を仲間外れにするな！！！」

女の子みたいに呼ばれるのはイヤだけど、仲間はずれはもっと嫌だ。

ミンミンミンミン...

「セミ、鳴いてますね」

「課長、お得意様にお詫びしにいく気が失せてきますね」

「まあ、そういうな、これも仕事だ、ああ、セミは鳴いているが、豆腐も実は鳴くんだ」

「豆腐ですか？」

部下が怪訝な顔をした。

「トゥ...フッフッフッフッ〜」

「くだらないことやってないで、行きますよ、課長」

「せっかく練習したのに！」

ミンミンゼミっぽく鳴くのがコツ。

カメラ

「買っちゃった、買っちゃった！」

電器店の紙袋を片手に喜ぶ先輩。

「何買ったんですか？」

「カメラ」

「あれ？何ヶ月か前にも買ってませんでしたか？」

「このカメラはいい奴なの、絹ごし豆腐が、くっきり絹ごし綺麗なの！」

「判断基準がそこですか」

「豆腐さんにしか、頼めないことなんです」

「断る」

「...しかし、豆腐さんがやってくれないと...話が進められません」

沈黙がしばらく続いて。

「今回だけだからな」

「ありがとうございます」

そうして豆腐の体に、まず1と書かれた。

「1の裏の面が6だ」

「足して数字が7になるように、書いていくんですね」

「そうだ」

書き終わると、豆腐はみんなのために転がり始めた。

「3でした、3コマ進んで、このマスの指示は、ファーストフードでスマイルだけ注文して、出来ましたら、5マス進めます」

「豆腐作りは体力だからよ」

「朝も早いでもんね」

「いや、そうじゃなくて」

チラリと移る影。

「新人、お前、ドアに鍵かけてこなかったらろう」

「あっ、...すいません」

ビュン！

何かの影が新人の前を通る。

「今のは？」

「豆乳だ、あいつらは足が早いんだ」

「足って、その足」

「一旦こうなると、四時間は追いかける羽目になる、新人、お前陸上部だったよな」

「俺、その要員ですか！」

豆乳を捕まえようとするのだが、豆乳は素早く、捕まえる所か翻弄されている。

「お前にゃ捕まえられないと、豆乳の奴、ごろ寝して漫画見始めてやがるな」

「スゲー悔しい」

「バカだな、そこがチャンスなんだ」

先輩は正面から、豆乳に近づいていく、しかし豆乳は逃げ切れる自信があるらしく、油断している。

パシ！

先輩は豆乳を捕まえた。

「ヤッター！」

「ざっと、こんなもんだな、俺も新人の頃、散々逃げられたからな」

意外と正面から捕まえに行くと、盲点について捕まえやすいことを教えてくれた。

「でも、逃がさないのが一番いいんだからな」

「は～い、気をつけます」

ふと、オープンカフェにいた美女と目が合った。

「ふっふっ」

意味深な笑みを浮かべる。

「...お前、先に帰ってて」

「豆腐さんも、後で来てくださいね」

少々豆腐の様子がおかしかったような気がするが、そのまま私は家に帰った。

数時間後。

「ただいま」

帰ってきたのは、穴だらけの豆腐。

「豆腐さん、どうしたんですか？ネズミにでもやられたんですか？」

「ちょっとな」

「ちょっとじゃないですよ」

「私は食べたいときに、豆腐を食べるの」　それが豆食系女子。

「ランチのトーストと豆腐のサラダお待たせしました」

「ありがとう」

さて、食べようかと、カラトリーに手を伸ばすと。

「お客様」

「何でしょう」

「サラダのドレッシングを聞き忘れておりました」

「何があるの？」

「フレンチ、シーザー、イタリアンの三種類です」

「どれにしようかな」

「イタリアンで」

迷っていると、サラダの豆腐がイタリアンを所望した。

似合う

「何で九条じゃないの？」

豆腐が今日のネギが九条ネギでないことを不満に思っているようだ。

「売り切れだったんだよ」

「私は九条じゃなきゃイヤなの」

「九条は確かになかったけどさ、代わりに似合うのなかったって、選んで来たんだけどな」

「...」

「どうした？やっぱり九条じゃなきゃ駄目か？」

「今日だけは」

「えっ？」

「今日だけは九条じゃなくても、大丈夫です！」

「ああ、そうか」

「でも次からは九条ですよ」

「わかった、わかった」

そんな話をしてから、今日の夕食は始まる。

「助手くん、私は豆腐が好きあまりに、豆腐の気持ちがわかるマシンを作ってみたぞ！」
博士は頭が良いのだけど、常人には理解されにくい発明をしてしまう。

「この間も、オフクロにあんたはいつまで発明するのって怒られた」
それを自信を持って言う。

「博士、準備が整いました」

「おお、じゃあ、豆腐が私をどう思っているか、まあ、もちろん愛されていると思うがね」

結果

『愛されすぎてつまらない』

「やっぱり豆腐見ると、興奮するのが悪いんじゃないですか？」

「そんな助手君まで、私の愛が重いだなんて！」

博士は己の愛で悩む。

水瓶座

今日の水瓶座のラッキーアイテムは、鰹節、出かける時に振りかけてみて、素敵な出会いがあるかも。

「何これ？」

たまたま読んだ雑誌の占いを見たら、そんな文章だった。

「誰が鰹節かけるんだろう？」

雑誌を置くと、置いてすぐに豆腐がその雑誌を読み始めた。

30分後、豆腐が鰹節を買っていた。

（あの豆腐、もしかして水瓶座！）

そして素敵な出会いを期待してます。

「パパ、海行きたい！」

「もう、お盆だからダメ！」

「何で！」

「海の中はクラゲがいっぱいだし、土用の波っていう、怖い波がいきなりだし、それに」

「それに？」

「浜ではたくさんの豆腐がバーベキューしているから、邪魔になったらダメだろう」

「は～い」

子供の時は、それで納得したけど、何で豆腐が浜で、バーベキューしているんだろうか。
情報求む。

「それでは新色についてお話をしたいと思います」

「待った！」

「なんでしょう、豆腐統括部長」

「季節のたびに、新製品を出すのが、宿命といえば、宿命なのだが、色の名前も、ただの赤とか、ただの黒じゃ物足りないと思うが」

「そうですね、海外だと、紫をラベンダーとか、言いますからね」

「ファッションブランドだと、もっとややこしい名前つけているよな」

「統括部長、何か、妙案いただけますか？」

「豆腐がホワイトであることを変えなければ、自由に提案してくれたまえ」

「わかりました」

凜とした白、ヒヤヤッコホワイト！

柔らかなユドウフホワイト。

「海外から、ヒヤヤッコとユドウフの説明を求められてますが」

「説明に三日はかかると伝えておけ」

クーポン

クーポンアプリを開いて、レジを待つ。

どれにしようかなと悩んでいると。

502番

『ハンバーガー・ポテト・ドリンク+冷や奴 500円』

ここで冷や奴か...とも思ったが、安いし、それにした。

四番

バッターボックスに次の打者が入る。

「四番、山田君」

「タイム！」

ピッチャーは満塁で四番ということもあってか、タイムを取ってもらい、監督の元に向かう。

「なんですか、山田って、豆腐じゃないですか！」

「そうだ、強打者の山田は四番で、豆腐だ！」

こういう場合、気迫負けした方が、負けるというのは相場である。

カキーン！

僕たちの夏は終わった。

豆腐メイキング

こちらは豆腐さんに投稿した際のネタになります、加筆修正したり、ボツった物を載せております。

「もはや、白は白と呼べぬ、トウフホワイトと呼べ！」

⇒凜とした白

「ふっふっふっ、このプラネタリウムの星は大豆だ、それなのに感動してやがる」

⇒なんかボツ

「私が豆腐を1000丁食べる！ならば私は1500丁作る！」

⇒古事記だなボツ

ここまで見てくださりまして、感謝いたします。